the People

元気なまちには　元気な主張を続け
元気に行動する　市民がいる

the people（ザ･ピープル）
2017年　4月発行

発　行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田　恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南５－６
タウンモールリスポ内
TEL:**0246-52-2511**　FAX:**0246-38-9538**
E-mail ：the-people@email.plala.or.jp
ＵＲＬ：http://npo-thepeople.com/

浜通りコットンベルト化構想 スタート

今年度、地球環境基金からの支援をいただき、新しい事業がスタートすることになりました。事業名は、「福島浜通りでの帰還を後押し　コットンベルト実現化事業」。いわき市を中心としてスタートしたオーガニックコットンの栽培を、浜通りに広めて「コットンベルト」を形成することを目指すというものです。今春から、南相馬市原町区・小高区で連携してコットン栽培を行おうという農家さんが現れました。種と栽培マニュアルを提供し、播種の時期を待っているところです。また、先日帰還が始まった富岡町でも栽培の動きが生まれています。南のいわき市から北の南相馬市まで。コットン栽培を帯のように繋げて、復興のシンボルにしようという構想です。

コットンはセシウムの移行係数が0.0086と低い作物と言われています。また、含まれる成分が生殖能力を低下させるためイノシシなどの獣害の影響を受けにくい作物であるともいわれています。除染を済ませ、安全が確認されたそれぞれの畑で、最初に手掛けて頂ける作物として提案をしていこうとしているのです。もちろん、土壌や収穫物のベクレルチェックも行い、安全安心を十分に確保していくことにしています。双葉郡内で協働してくださる方を募集しています。詳しくは事務局までお尋ねください。

コットン栽培　初めの一歩

このシーズンは、1年を通したコットン栽培のスタート地点。毎年、同じように栽培しながらも、同じ様な収穫に恵まれるわけではない農業の難しさがついてまわります。しかし、昨年度総収穫量1トン（シードコットン）越えを達成した自信を胸に、今年の春の圃場準備作業は、コットンチームを中心に例年になく順調に動き出しています。そして、播種までのこの1、2ヶ月は、コットン栽培にとっては春の農繁期。まさに猫の手も借りたい忙しさが続きます。

この農繁期に合わせて、新入社員の研修の一つとして、コットン畑での農作業を採用しようとある企業が名乗りを上げてくださいました。東京ガスの社員の皆様には、昨年の秋から援農ボランティアとしておいでいただいています。そのご縁が広がって、今春の新入社員280名が、4月中に3回に分けてコットン畑においでくださったのです。

最も人数の多かった4月12日には、前日の雨がたたって畑の中での畝立てなどの作業ができない状況になってしまいました。しかしその悪条件の中でも、雨の後だからこそ必要性が痛感できる、畑に溜まった雨水を抜くための溝堀りの作業を中心に行っていただきました。作業を終える頃には泥まみれになる方もおられたほど、熱心に作業にあたってくださいました。作業のあと「コットンが収穫できる頃にまた来たいです」との言葉を残してコットン畑を後にした新入社員の皆さん。ここでの体験が、これからの社会人としての生活に活かしていただけたら嬉しい限りです。

浜風きらら　オープン

東日本大震災により大きな被災を被った地区として、いわき市の久之浜地区があります。当時、地震、津波の被災に加え、火災が発生して町の中心部のほとんどを焼失しました。その上に、福島第一原発から30㎞の圏内に位置するため、原発事故後一時的に全町民が避難せざるを得ない状況に追い込まれました。この久之浜町の津波被災エリアの復旧が進み、住民が戻ってこようとしている今日、買い物のできる場を取り戻そうと、4月20日に新しい商業施設「浜風きらら」がオープンしました。

郵便局や食料品店、美容院などが入るこの施設への入居をお誘い頂き、ピープルではチャリティショップをオープンさせました。地域内外で回収された古着の良品ばかりを集めたリユース販売。そして、ボランティアスタッフの手により生み出された古着からのリメイク品やオーガニックコットン製品のご紹介も行います。このショップの運営に当たるスタッフは、久之浜町にお住いの3人。地域に愛される店舗になることが第一目標と店頭で笑顔を振りまいています。お近くにおいでの際は、どうぞお立ち寄りください。

みんなの畑 コットン&菜園 スタート

原発避難してこられた方々が地域住民とコットン栽培を通して仲間になれるように…と始められた「みんなの畑」の事業が、今年も動き出します。

毎月1回の活動日には、富岡町からの避難者の方を中心に30名近くの方が集まってこられます。今年は、復興庁「心の復興」の助成事業として、「みんなの畑菜園」も運営。参加者の皆さんが希望される野菜を栽培し、その収穫物を交流イベントでの昼食用食材として活用してみようという試みもスタートします。

畑に集う方が増えれば、それだけ交流の輪が広がります。ぜひ、ご参加ください。

震災後活動の検証まとまる

ピープルでは、東日本大震災が発生した直後から被災者・避難者の方たちを支援する活動を継続してきました。昨年度、震災から丸5年に設定されていた集中復興期間を経過したことをひとつの区切りとして、その取り組みがどのようなものであったかを検証する作業を行いました。発災直後から現在に至るまでの支援活動の流れを振り返り、その活動の中で関わった方たちへのヒアリングを行い、専門家の評価を受けたのです。

この検証結果をまとめた冊子が完成しています。まだ若干の残りがあります。希望される方は事務局までお問い合わせください。

つぶやき

又々犬のことで呟くことになり我ながら呆れている。何故こんな事になったのかを説明すれば、皆さんに納得していただけると思う▼市営住宅に住むKさん（74歳）は、身寄りのない独り暮らし。犬を相棒に生活していた。数日前、本人が救急搬送され犬が置き去りとなった。一日中吠えていたため近隣で問題になっていたらしい。近くに住む本会のコットンチームのAさんから何とかならないかと相談を受けた▼Kさんと言えば10年前、本会で古着回収車を運転されていた方である。体調を崩し辞めてからお会いしたことはなかったが、経緯を聞けば私としても動かざるを得ず退院するまで預かることにした。ところが犬は10キロもある（9歳）のダックスフンド。小型犬しか飼ったことのない私にとっては驚きだった。名前は勝手に「くろべえ」と名付けた。散歩に連れ出しても白内障らしく物にぶつかりながら歩く▼数日後、今後の処遇について行政に行き入院先を聞いたが個人情報なので教えて頂けなかった。「それじゃ犬は私か預かっていることを伝えて下さいと」帰った。翌日Kさんの入院先は近隣の方々の話からすぐに判明し病院を訪ねた。脳梗塞で倒れ意識はあるが言葉が出でこない様子。私のことは覚えておられ、こちらの話に笑顔で頷く。犬のことは何時までも預かっている訳にもいかないので、犬猫を捨てない会や里親会に相談することを伝えると、手を合わせて何度も首を縦に振っておられた▼早速交渉を始めたが様々な課題にぶつかった。まず預かって頂くためには、犬の所有権の問題があり、第三者を交えた確認書が必要である事。幸いセンターの協力を受け確認書の作成はクリアした。しかし去勢手術など費用負担の問題があり簡単に解決出来るものではなかった。少し時間は掛かりそうではあるが、最後まで「くろべえ」が幸せに生きて行けるよう取組んでいくつもりである▼今回の出来事を通し痛感したことは、ペットは可愛からとか、癒しの存在だけで飼ってはならないと言うこと。難しいかもしれないが双方の年齢的将来を見据えた上で飼うべきなのだ。一度飼ってしまえば家族の一員であり、簡単に捨てたり処分するなど絶対に許される事ではない。ただ問題は飼えない状況が発生した場合である。東日本大震災の原発事故で突然避難せざるを得なくなり置き去りになった多くの大猫達。つい最近も避難生活から一年となる九州熊本地震で家族と離れ預けられたペット達のニュースが報じられた。何事か起きると犠牲になるのは動物達である。人間の元でしか生きて行けないペット達の処遇のあり方について、責任を持つのも又人間であることを考えさせられた出来事だった。（甘南備）